

佛教史學會第六十九回學術大会

# 研究発表要旨

日 時…二〇一八年十一月二十四日(土)  
会 場…佛教大学 紫野キャンパス

佛教史學會第六十九回學術大會開催日程

日時：二〇一八年十一月二十四日（土）  
会場：佛教大学紫野キャンパス（京都市北区紫野北花ノ坊町九六）

午前の部（午前十時～十二時）

■東洋部会（一号館四一八教室）

『禅法要解』の四諦説

僧祐撰『釈迦譜』より見る中国の仏伝受容

…とくに涅槃の場面を中心として

佛教大学 田中 裕成  
龍谷大学 岸田 悠里

大手前大学 山口 正晃

■日本部会（一号館四二〇教室）

称徳朝の仏教改革

「学山」根来寺の形成と展開

戦前と戦後の断絶と継続

—高神覚昇『般若心経講義』を事例に—

日本学術振興会 内田 敦士  
大阪府教育庁 三好 英樹  
名古屋大谷高等学校 新野 和暢

午後の部（午後一時～五時十分）

■合同部会（一号館四二〇教室）

幕末の東本願寺と東照宮

曇鸞『無量寿経論註』の流伝

—諸師の引用文より見て—

大谷大学 平野 寿則  
大阪経済法科大学 辻本 俊郎

氏寺と「知識」

日本古写経研究序説

東京医療保健大学 三舟 隆之  
国際仏教学大学院大学 落合 俊典

## 『禅法要解』の四諦説

佛敎大学 田中 裕成

仏道に入った者は仏果や阿羅漢果等の果報を獲得すべく修行を行う。この修行の方法は經典や論書に説かれるが、その方法をまとめた修行マニュアルとして、禅経が存在する。このうち、羅什による『坐禅三昧経』に関しては念仏觀が説かれることから大乘研究者によって重要視されてきた。一方で、近年ではアビダルマ研究としても、『サウンダラナンダ』や経部的思想が見いだせることから再評価されている。

さて、この『坐禅三昧経』は羅什が『大智度論』訳出中に出世間道を主な内容としてまとめたものである。その際に、時を同じくしてまとめられた書物として『禅法要解』が存在する。本書は主に世間道について述べられた書物であるが、菅野〔2002〕が僅かに触れるのみで、本書を積極的に取り扱った研究は存在しない。その中、発表者は『禅法要解』中に『サウンダラナンダ』の四諦説(Saun. 16. 640)に相当する漢訳が散文の形で埋め込まれていることを新たに発見し、それがオリジナルに近いことを論証した。

さて、この『禅法要解』中の『サウンダラナンダ』は『禅法要解』の四諦説の教証として引用される。『サウンダラナンダ』の四諦説については本庄〔1987〕によって経部的要素が含まれていることが指摘されており、そのような『サウンダラナンダ』を教証とする『禅法要解』の四諦説にも経部的要素が存在することが推測される。そこで、本発表では『禅法要解』の全体像を紹

介したうえで、『禅法要解』の四諦説をとりあげ、《婆沙論》に説かれる譬喩師 (Dīṣṭāntika) 等の四諦説との比較から検討してみたい。

## 僧祐撰『釈迦譜』より見る中国の仏伝受容

…とくに涅槃の場面を中心として

龍谷大学 岸田 悠里

南斉から梁にかけて活躍した僧祐(445-518)が物した『釈迦譜』は、中国における仏伝書として、第一に指を屈すべき作品である。本書は、中国のみならず、日本・朝鮮半島にも影響を与えたことが知られ、東アジアの仏伝を考究する上では不可欠の書である。

ところが、『釈迦譜』については未だ研究が十全に尽くされているとは言いがたい。その理由の一つとして、『釈迦譜』が諸仏典の中から釈迦の事績にかかわる伝を集めた類書であることが挙げられよう。類書は、辞典や百科全書の如きものであるが、編纂者が直接に著述したものでなく、既存の文献からの引用文によって構成され、さらにその引用文を何らかの類に分けて、整理編集したものである。そのため、そこに編纂者である僧祐独自の思想を見いだすことは困難であり、本書は長らく漢訳仏伝經典の補佐的位置に置かれてきたように思う。

本発表では、『釈迦譜』の中でもとりわけ巻四「釈迦双樹般涅槃記」に収録される釈迦涅槃前後の伝に注目し、中国がいかにかに仏伝を受容し、また発展させていったのかを考究する。「般涅槃記」は、主として劉宋・慧觀等訳『大般涅槃經』から記事を引用し、さらに『長阿含經』『摩訶摩耶經』などの諸經典をも参照している。とくに僧祐は、『摩訶摩耶經』巻下の中から、涅槃に入った釈迦が、生母である摩耶夫人の為に再び棺から起き上がったという事蹟(以下、「金棺出

現」を、かなりの紙幅を割いて引用している。『摩訶摩耶經』の訳者は、従来、南齊の曇景とされてきたが、近年では中国撰述經典と見なされている。僧祐自身は『摩訶摩耶經』を失訳と判定しているものの、引用の分量をみれば、「金棺出現」の事蹟に対する注目の度合いがうかがえる。この「金棺出現」が、『釈迦譜』に引用されることにより、涅槃前後の事蹟の一つとして後世に受容されていくことを指摘したい。

また、武周期(690～705)には「金棺出現」の場面を含む涅槃變相図が登場するが、図像全体としては『摩訶摩耶經』に無い場面も多く描かれ、むしろ『釈迦譜』とほとんど一致する。さらに、『釈迦譜』を踏まえ、こうした涅槃變相図中の「金棺出現」場面を僧祐が述べるように「不滅の徴」と見なすことで、本場面が単なる「孝」の表象に止まらないことを述べる。

以上のように、『釈迦譜』に注目することにより、本書が受容したエピソードが仏伝として整合性をもち、規範として後世に継承されていくことで、中国独自の仏伝が生まれていった可能性を指摘する。

## 仏名経類と三階教の關係について

大手前大学 山口 正晃

報告者はこれまで、敦煌出土の仏名経類を主要な対象としつつ、中国編纂の歴代経録や日本の正倉院文書をも俎上に載せて、隋唐期およびそれ以前の中国、さらには周辺地域も含めた中で仏名経類の流布状況について研究を進めてきた。そうした中で分かってきたことは、大正蔵などによつて現在我々が目睹しうる仏名経類は、もともと存在していた仏名経類の中のごく一部にすぎない、ということである。具体的には、現在まで伝世されてきたのは訳者がはっきりしているか、もしくは大部で網羅的な仏名経ばかりであつて、それらのほとんどは隋唐期に現れたもの（一部北朝もあるが）であること、言い換えるとそれ以前の初期の段階における雑多な、小部の仏名経類はほとんどが姿を消してしまつたわけである。さらに重要なのは、歴代経録や大蔵経には全く著録されていない『十方千五百仏名』という仏名経が、敦煌で非常に盛行していたのみならず、実は日本にも伝来していた痕跡が認められることである。つまり、現在の我々が認識している以上には、はるかに豊かな「仏名経の世界」が、どうやらかつて東アジア世界には広がっていたと思しい。

一方、隋唐期に民衆に受け入れられつつも政権によりたびたび弾圧を被り、やがて史上からその姿を消した三階教に関する典籍が敦煌文献の中に発見されたのが百年余り前。以来、矢吹慶輝の大著を始めとして近年の西本照真の重厚な研究に至るまで、三階教に関する多くのこと、たとえば三階典籍の種類や内容、またそれに基づく教理について、あるいは信仰の実践に関わること

などが明らかになってきた。その中には三階典籍としての仏名経である『七階仏名経』も当然含まれる。ところが、これを、上記したような仏名経類全体と関連付けて分析する研究は、管見の限り見当たらない。

そこで本報告では、仏名経類全体における『七階仏名経』の位置づけを探りつつ、三階教盛衰の背後に透けてみえるいくつかの事柄に関して私見を述べてみたい。

## 称徳朝の仏教改革

日本学術振興会 内田 敦士

称徳朝（764～770）は、仏教の腐敗・墮落の極致とされてきた。このような考え方は、辻善之助『日本仏教史第一巻 上世篇』（岩波書店、1944年）において、多くの史料に基づいて具体的に示され、現在でも根強く残っている。

しかし、近年、称徳朝の仏教政策を再評価する動きがある。吉川真司氏は、称徳朝に創始された御齋会は、その後も絶えることなく行われ、護国法会の中核を担い続けたことに注目し、以下のように述べる。称徳朝の「仏教政治」には確かに行きすぎた面も見られるが、大化改新以来の仏教政策の集大成でもあり、古代日本の「文明化」の一つの到達点を示している。光仁・桓武朝の政策は、それをさらに展開したものと見える。光仁・桓武朝も確かに小画面と認められるが、あまりにそればかりを強調すると、桓武の宣揚した「王朝交替の物語」に取り込まれてしまう（「大極殿儀式と時期区分論」『国立歴史民俗博物館研究報告』134、2007年）。この指摘は、非常に重要であると考ええる。

本報告では、内田敦士「景雲一切経の写経・勘経事業と称徳・道鏡政権」（『続日本紀研究』399、2012年）、同「南京三会の成立に関する再検討」（『日本歴史』795、2014年）など、報告者が行ってきた関係する研究を踏まえて、称徳朝における仏教政策を再検討したい。吉川氏も注目した御齋会については、前後の時代の護国法会体系との関係や、僧侶統制における意義を追究するこ

とで、さらに考察を深める。また、あまり注目されていない景雲一切経の写経・勘経事業に関しては、旧稿では十分に検討することのできなかつた疏の勘経について、関係史料の再検討を行う。これらの考察によって、称徳朝の仏教政策には、腐敗や墮落ではなく、改革と評価できる側面があったことを明らかにする。

## 「学山」根来寺の形成と展開

大阪府教育庁 三好 英樹

紀伊国根来寺(和歌山県岩出市)は、平安時代後期に覺鑿によって高野山上に創建された伝法院(のち大伝法院)とともに展開する真言寺院である。十三世紀末、大伝法院方は金剛峯寺方との対立から高野山上を離れ、末寺の存した根来の地へと活動の拠点を移動、その後、根来の地にて仏(本尊・伽藍)・法(仏事法会)・僧(僧侶組織)といった三宝と経済基盤を順次備えたことで、十四世紀末から十五世紀初頭、根来寺大伝法院を中心とする根来寺を成立させた。

十六世紀、根来寺は、西洋で発行された「メルカトル世界図」中の日本列島に「Miaco」(都)と並んで「Negra」(根来)と記されるほど、また、鶴呑みには出来ないもののキリスト教宣教師ルイス・フロイスの『日本史』に坊院数二千から三千、僧侶数八千から一万人と記述されるほど、日本列島を代表する大寺院となる。考古学の成果によれば、この時期、四五〇を超える坊院や堂舎が建ち並んでいたと推測されている。

これまで、中世後期における地方の顕密寺院の展開は、その主たる要因として行人方による諸活動が重視され、根来寺においても十五世紀末から十六世紀の行人方による活発な流通・経済活動や武力行使などが明らかにされている。しかし、寺院の寺院たる所以、つまり寺院の根本的な存立基盤である宗教や信仰に基づく活動も、寺院の展開上に位置づける必要がある。そして、行人も修験道など様々な仏道修行を行ってはいるものの、寺内における仏事法会や教学研鑽の主

たる担い手は、やはり学僧である。

本報告では、中世根来寺の展開過程を、未だ詳らかになっていない学僧のあり様に注目して考察する。その際、全国から根来寺へと修学のために訪れた学僧である客僧に着目し、寺内での存在形態や修学の実態、その時代的な変遷を確認することで、学問寺院としての姿、「学山」としての根来寺の形成と展開の過程を明らかにしたい。

## 戦前と戦後の断絶と継続

### —高神覚昇『般若心経講義』を事例に—

名古屋大谷高等学校 新野 和暢

本発表の目的は、仏教思想に関する、戦中と戦後の連続性と断切を検証することにある。具体的には、高神覚昇著『般若心経講義』を主たるテキストに用いるて、戦中から戦後をいきた仏教家の思想構造に迫る。

その理由は二つある。一つは、著者である高神のパーソナリティの問題である。彼は戦時中、戦争を肯定する発言をしていたことが知られており、彼に対する先行研究も複数存在する。『兵隊の犠牲によつて日本が前進する。』私共銃後の国民はまさしくこの言葉を神の声、仏の教としてうけとるべきだとおもふ<sup>1</sup>などといった戦争協力の発言は、敗戦を境に鳴りを潜めるが、その戦争肯定が社会的背景に起因していたのか否かという問題は、検討の余地が残されたままである。もう一つの理由は、1934（昭和9）年に初版本が上梓されて以来、現在も読まれ続けている仏教書であり、かつ、内容の改訂が1947（昭和22）年になされている点にある。星野英輝が「戦時下仏教者の思想構造—高神覚昇を例として—」<sup>2</sup>でこの著作の資料的価値を明らかにし

<sup>1</sup> 『靖國の精神』高神覚昇著、1942年6月25日、第一書房、105頁。

<sup>2</sup> 『近代仏教』第5号、1998年3月、所収。

ているが、あらためて戦中と戦後の二つの書籍を校訂すると、戦争に関係すると思われる言説を削除する改訂に留まっているわけではないことが読み取れる。共産主義に対する言説の削除など、時代的な問題が背景に見えてくる。さらに、戦後版に新たに書き加えられた八紘一宇の思想について記されている。そもそも改訂とは、何等かの事情によって相応しくないと再判断した結果、削除や加筆、文言修正を施す行為である。ゆえに戦中版と戦後版に見られるそれらの変更箇所を確認することによって、戦前と戦後の思想の変化を読み取ることの一助になると考えられる。今回の発表では、こうした改訂の事実を整理し検討を加え、さらに、同時期に出版及び改訂出版がなされた友松圓諦著『法句経講義』との比較を織り交ぜながら、戦中戦後を生きた仏教家の思想構造を明らかにしたい。

## 幕末の東本願寺と東照宮

大谷大学 平野 寿則

東本願寺は、慶長七年（一六〇二）、退隱の身にあつた第十二代の教如が、関ヶ原の戦いに勝利した徳川家康から京都烏丸六条に寺地の寄進を受けて寺基を定めたことに始まる。ついで上野国厩橋妙安寺に安置されていた親鸞の木像が寄進され、慶長八年に阿弥陀堂、翌九年には御影堂を建立し遷仏・遷座がなされ、ここに両堂がならびたつ東本願寺が別立した。その後も唐門・鐘楼など寺観の整備がおこなわれ、元和五年（一六一九）に二代將軍秀忠から寺地安堵の朱印状を得て、寛永十八年（一六四一）には、三代將軍家光から新たに境内地東方に寺地を増された（現在の涉成園）。そして、万治四年（一六六二）の親鸞の四百回忌を迎えるにあり両堂の改築が進められ、明暦四年（一六五八）に御影堂、少し遅れて寛文十年（一六七〇）には阿弥陀堂が竣工し、壮大な規模の伽藍となった。

そののち、天明・文政・安政・元治と四度の焼失に遭い、そのたびに門末が一丸となって再建をなしたが、同時に、幕府から御用林や資金を拝領するなど、多大な援助を得た事業でもあつた。こうした格別な由緒から、幕末の混乱期、両者は再び結びつきを深めていくことになる。それを象徴するのが、文久元年（一八六一）の「東照宮別堂」造立の通達である。これは安政度の再建に下賜した材木の余材で、現阿弥陀堂南側に堂宇を建立し、家康の位牌を安置させようとするものであつた。同年三月には、親鸞六百回忌に合わせて釣燈籠や幔幕が寄進されており、翌年には

完成した東照宮本殿で遷座・移徙の法要が執り行われている。文久三年（一八六三）には、将軍後見職の一橋慶喜や十四代将軍家茂が上洛して、幕府権力の回復をはかるため朝幕交をおこなったが、その舞台となったのが東本願寺であった。

本報告では、幕末の政治情勢のなかで両者が結びつきを深めていく様子を整理すると共に、境内地に造立された東照宮の諸相を取り上げ、その企図するところを考えてみたい。

## 曇鸞『無量寿経論註』の流伝

### —諸師の引用文より見て—

大阪経済法科大学 辻本 俊郎

Yasubandhu (世親、西暦四〇〇〜四八〇年)著 Bodhiruci (菩提流支、西暦五〇八〜五二五年まで訳出に従事)訳『無量寿経論』は、サンスクリット語原典も現存せず、チベット語訳もなく、漢訳一本のみである。しかし、諸テキストによって字句の異同が甚だしく、筆者の調査によると大きく『無量寿経論』系と曇鸞(西暦四七六〜五四二年)『無量寿経論註』(以下、『論註』とする)抽出本系の二つに分けられる。「高麗再雕版」テキストと『論註』抽出本とを比べた場合、二〇〇字ほど字句の異同が確認できるのである。さらに、前者は宋版、高麗再雕版、古写本系の三つの系統に分けられるのである。その結果をふまえて諸師の著作に引用された『無量寿経論』を精査したところ、中国・隋代においては曇鸞『論註』抽出本、古写本系が、新羅においては曇鸞『論註』抽出本、日本の平安時代には曇鸞『論註』抽出本、古写本系のテキストが確認されたのである。以上のように『無量寿経論』テキストの系統、および諸師が見た『無量寿経論』テキストがほぼ明らかとなったと言えよう。

今回の発表では『無量寿経論』ではなく、中国における『論註』テキストの流伝状況を諸師の引用文を精査することによって明確にしたいと考えている。

さて、ここで問題とする曇鸞『論註』は中国大陸においていつしか散逸され、清朝末期になっ

てようやく日本からの逆輸入の形で再び中国にもたらされたのである。曇鸞『論註』は道綽（西曆五六二〜六四五年）『安樂集』、智顛偽撰（西曆八世紀前半）『淨土十疑論』、延寿（西曆九〇四〜九七五年）『宗鏡錄』、『万善同帰集』に引用されていることはよく知られている。そこで、西曆十世紀に活躍した延寿によって『論註』が引用されているからといって西曆十世紀、すなわち宋代初期まで『論註』が中国において存在していたと考えられるかもしれないが、問題はそう単純ではない。何故ならば、近年になって柴田泰先生によって延寿が『論註』本文を引用したのではなく、道綽『安樂集』に通じて、すなわち『安樂集』からの孫引きだと結論付けられたからである。それでは曇鸞『論註』はいつごろまで中国大陸においてその存在が確認されるかというと、実は先行研究の見解が分かれ、明らかではないのが実情である。

そこで今までに発表された先学の諸説を踏まえつつ、道綽『安樂集』、智顛疑撰『淨土十疑論』、延寿『宗鏡錄』、『万善同帰集』に引用された曇鸞『論註』本文を精査することによって中国本土においていつごろまでその存在が確認できるであろうか、ということ突き詰めようとするものである。

## 氏寺と「知識」

東京医療保健大学 三舟 隆之

近年では、寺院の造営に壇越以外に参加している氏族の存在から、有力氏族を中心とした「知識寺」・「知識寺院」という概念を指摘する説が現れている。このような「知識寺」・「知識寺院」は、従来の「氏寺」という概念とは異なるものである。そこで「金井沢碑文」や「既多寺知識経」・「西琳寺縁起」などから「知識」の形態を分析し、氏族研究の成果も加えて「氏寺」の性格を再検討したい。

「西琳寺縁起」では文氏を中心に姻族や地縁的關係を結ぶ氏族も寺院の造営などに参加しており、また「既多寺知識経」の写経事業でも針間国造・針間直氏を中心とする擬制的な血縁集団に地域小集団となるような地縁的關係氏族が参加していることが明らかである。『日本靈異記』上巻十縁の説話でも、方向悔過の法会に壇越を中心とする親族以外に他人を含めた法会の衆が参加しており、造寺や写経などのような仏教事業には血縁集団を中心としながら地縁的關係を結ぶ氏族も参加して共同体の關係強化を図っていることが窺える。そのため寺院においても、壇越の氏族を中心としながら血縁關係ではない他氏族が参加しているため、「知識寺院」として認識されがちであるが、その基盤となる本質はやはり「氏」の同族關係である。

「知識」にはその形態から「自発型知識」と「徴発型知識」が存在すると考えるが、どちらも壇越とその同族を含む共同体を中心に地縁的地域共同体が参加することが見受けられ、従来それらを

「知識寺」や「知識寺院」とみなしてきたが、それ自体が実は「氏寺」の実態であると考えたい。したがって「氏寺」とは従来、氏族の族長・氏上の建立が建立し氏族一門の擁護帰依を受けた寺であると考えられてきたが、血縁を中心とする氏族一門だけでなく擬制的同族関係を結ぶ氏族と、さらには血縁集団ではない地縁的関係の氏族も含めて、その共同体を維持していく精神的な紐帯となるものが「氏寺」であったと考えたい。

## 日本古写経研究序説

国際仏教学大学院大学 落合 俊典

従来「日本古写経」という名辞は、主に文化財ならびに書道史方面からの視点に基づく用語であつたと思われる。仏教学・仏教史学からは特段研究対象とする理由はなかつたと言つてよい。日本古写経の厳密な定義もなされていなければ、か日本古写経に独自の文献的特徴を有すると考えられていたのでもなかつた。

ところが平成2年に七寺一切経から古逸經典が発見され俄然日本古写経に注目が集まつた。この七寺一切経は院政期も終焉を迎えようとした1175年から1180年にかけて尾張地方で書写された一切経であつたが、書写指針に法勝寺や梵釈寺などの当時著名な藏経を有する大寺院に拠つたことから一地方寺院の地域的特徴と限定することは出来なかつた。

その後、七寺一切経の調査と並行して金剛寺一切経・興聖寺一切経・西方寺一切経なども行われてきた。これらは平安・鎌倉写経であるが、基本的に藍本（書写底本）は奈良写経と想定される。ただし北宋勅版（開宝藏・蜀版）を底本とする写経も三十部前後見られるので注意しなければならぬ。

「日本古写経」は、仏教学上の価値を有すると考えられるが、それはどのような観点から主張できるのであるか。先ず系譜論的考察から日本古写経の中核をなす奈良朝勅定一切経は唐長安仏教のテキストを写瓶のように伝承している点である。天平写経、神護景雲写経など国家がその

機能を総動員して書写した日本における宮廷写経と称してもよいものである。

第二は日本古写経の本文は開宝藏系や江南諸藏や契丹藏と異なり、独自のテキスト群であつて、その本文の相違は僅少とはいへ重要である。『馬鳴菩薩伝』のように刊本大藏経本と日本古写経本と全く異なるテキストすら現出している。

以上のことから日本古写経の集成が、仏教学研究の今日的必須要件に相違ないがその分量が膨大であり困難を極めた。そこで奈良朝の勅定一切経に焦点を当てそのテキストデータを作成すればその価値が一目瞭然になると考えるに至った。具体的には正倉院聖語藏本を中心に他の奈良写経のテキストデータを集成し、刊本大藏経も含めた諸本の文献学的研究を行つていくものである。

